
ジンが死んだ日 ~ The Name ~

汀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジンが死んだ日 The Name

【Nコード】

N9378E

【作者名】

汀

【あらすじ】

犯罪組織に対する裏切り行為を行うと、裏切り者は死という制裁を受けることになる。かつて、組織に属する青年は、組織の上層部から裏切り者を殺すように指令された。誰もいない教会、青年は裏切り者の『ジン』を射殺する……。

殺し屋のうち、殺した者のことを忘れる生き方を選ぶ者は、割と多いらしい。

彼自身、そんな生き方を選んだ人間なのだと自覚があつた。

それでも、ふとした時に記憶の底から現れてくる人間がいる。もちろんそうなるのは、彼の記憶の中、どうしても忘れられない痕跡を残した者に限られるのだが。

たとえば、彼にとって様々な意味で礎^{いしづ}となつた男とか。

がらんどうの空間に、火薬と血の匂いが流れる。

半ば廃墟と化している教会の中、みじめに横たわっている2人の男。

倒れている彼等のうち1人は既に死んでおり、もう1人も、腹からひどく出血している。

彼等の傍らに歩み寄り、青年は冷たい目で2人を見下す。

青年によつてもたらされた、闇の世界で生きる者達の、ひとつの末路だつた。

ひとたび犯罪組織の中に入ったなら、その組織に背を向けることは許されない。

組織を裏切つた者には、ほぼ例外なく『死』という形の制裁が科される。

今回のケースでは、組織の上層部は、部下の造反を前もって感知していた。

敵対する組織に、情報を売ろうとする者がいるのだ、と。
自らの組織に背を向け、利益を得ようとする者がいるのだ、と。

カネとモノが交換される場所も含め、上層部は取引の前に全てを調べ上げていた。

組織に属する青年にとって、これは初の大仕事だった。

失敗は即、死につながる任務だが、成功すれば必ず良好な評価を受ける。

『ジンが組織を裏切った。お前がジンを殺せ』

……青年がそう指令を受けたのは、きのうの夜。

自身が上層部から注目されていることを、青年は以前から悟っていた。

そして、おそらく上層部が自分を試していることも。

ジンは、言わば青年の教官役のような男だった。

組織のために師匠を殺せるのか、上層部は指令の中で、青年にそう問うたのだ。

そして、一夜明けた今日。

ジンも、ジンの取引相手も、無防備にこの教会の中に入って来た。

教会の中に青年が潜んでいることに、ジンの取引相手は死ぬまで気付かない。

青年は、上層部の命令にあくまで忠実だ。

1発目の銃弾は取引相手の頭を、2発目の銃弾はジンの腹部を、それぞれ正確に貫いた。

決着がほぼ決まるまでに掛かった時間、……わずか数秒。

「動くな！」

ジンの身動きを言葉で制する。

もはや上司でない人間に、敬語を使う義理は無い。

構えを解かず、視線も外さないまま接近、十分に近づいてから銃を下に向ける。

「……上層部が感知していたのか」

絶望を含んだかすれ声で、ジンは呟いた。

銃口はジンの眉間に向けられている。

ジンは自身の運命を明確に悟っている、
この状況では悟らざるを得ない。

「その通りだ」

答えを返しつつ、青年は膝を付く。

とどめを確実に刺すために銃口を密着させると、ジンは小さく息

を吐いた。

「……そうか」

青年の目を、青年の長い銀髪を、そして銃を握る手を、順番に見つめた上でジンは笑った。

恐怖におののく顔ではなく、笑う顔。口の端を吊り上げた、嘲るような笑みだ。

「言い訳があるのか？」

「……無いな」

それならば、もうこの男を生かす理由はない。

教会に3度目の銃声が響いた。

青年の足元で、ジンの刈り込んだ茶髪が血に染まる。

普段信徒がいない教会で、このように息絶えるというのは、……
善いことなのか悪いことなのか。

そういえばジンは神を信じている人間だったのか。

そもそも、殺されること自体が途方もない不利益なのだと知った上で、あえて考えるが……、

「……下らない事か」

考えの無意味さに、思わずひとりごちる。

青年の任務は、あくまで『ジンと取引相手を殺すこと』。

『死体は放置しても構わない』と、わざわざ指令が下っている。

死体が腐敗しようが、あるいは後で教会ごと燃やされようが、青年が関わることはなかった。

ただ上手く殺せるのかを考えていればいい立場で、標的の思考を想像する必要など、ない。

「……」

祈る者がいない場所。

男2人の死体をしばらく無言で見つめた後で、青年は教会の出入口へと向かった。

ジンは組織を裏切った。

青年は師匠よりも組織を選んだ、組織の中で生きるために。

つまりは、そういうこと。

その後。

それから長い年月が過ぎ……

「兄貴、兄貴……？」

ウオツカの呼び声で彼は我に返る。

愛車の車中、心配そうにウオツカが彼を見つめていた。

『仕事』を終えた後、たまにウオツカが車の運転を代わることがある。

彼が運転できない身体状態のときはまずそうなる、のだが、……そうすると、彼が重篤な状況に陥るのではないかと、ウオツカは気が気でなくなってしまう。

「どうかされたんですかい？」

「何でもない。運転に集中しろ」

「は、はい……」

彼の命を受け、ウオツカは前方に向き直った。

医者に向かわなければならぬ時に、車ごと事故に遭ったら話にならない。

ウオツカから目を離し、彼は、まどろみの中で浮かび上がってきた情景を辿る。

殺し屋のうち、殺した者のことを忘れる生き方を選ぶ者は、割と多いらしい。

彼自身、そんな生き方を選んだ人間なのだと自覚があった。

それでも、ふとした時に記憶の底から現れてくる人間がいる。もちろんそうなるのは、彼の記憶の中、どうしても忘れられない痕跡を残した者に限られるのだが。

例えば、先代の『ジン』。

様々な意味で、彼の礎となった男だった。

誰に向けたのか分からない嘲笑を浮かべながら、死んでいった男でもある。

彼が青年だった頃、先代の『ジン』は、彼によって殺された。

殺された者のコードネームは、殺した者に受け継がれたのだ。

（後書き）

後書き

連載中の作品が何回目かの煮詰まり状態になったので、気分転換に短編の投稿です。

執筆時間は、下書きと打ち込みが約1時間半ずつ。

ほぼ勢いで書いたので、荒いところが結構あると思います。

書く時の課題は『いかに引っかけをうまく書くか』でした。

……うまく書けたのか？

2003年からファンフィクションを書いてますが、実は今回が初の短編作品です。……たぶん。

（上下編なら1度書いたけど）

現在、オリキャラ多めのシリーズを連載中ですが、そのシリーズとこの短編に関係を持たせるかは、今のところ未定です。
もしかしたらつなげるかも、ですが。

*9月1日追記

本文を改稿させて頂きました。

色々思うところがあり、シーンをひとつ書き足しています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9378e/>

ジンが死んだ日～The Name～

2010年10月8日21時36分発行